

主夫の誕生

水戸部 浩子

いまや少子化問題は日本の流行語になりそうな勢いで、ひとびとの口にはのぼっている。

そして、平成十年度の厚生白書もそれに触れ「少子社会を考える」をテーマにした。

たまたま白書を書くための事例集めを手伝い、北海道と東北編を執筆担当したいきさつがあつて、主夫の誕生を知った。

シングルライフを決めこむ女性がいる一方で、主夫業を望んでやっている男性もあり、世の中は従来あつた結婚の形態がまるで変わってきた。

「アタシが働いてあげるわ」

という妻の進出で夫は家事と育児に専念し、彼は好きな趣味もどきの生活をおくつていく。これまでの夫と妻の役割の変換である。

だから保育園にも学校のPTAにも夫が出てかけていき、隣組の集会にも顔を出し、率先して地域活動をやっている。買い物もやり、近所の奥さんたちと長い立ち話で、野菜の値段が上がったことなども話す。

「あそこのスーパーは来週の水曜日が安売りよ」

こういう情報はありがたく聞き、家計簿をつけ、ボタンのとれた子供服のつくりもそそくさとやる。だが、彼はミジメだなんて少しも思っておらず、喜喜として針を動かかし、

「あすの朝食は何にしようか」

などと考えるのが、息抜きや気晴らしになるらしい。こういう男の人をひとむかし前まではヒモと呼んだり、髪結いの亭主と揶揄していた。ところが周囲の奥さんたちは、違和感を持つどころか、三人の子を育てる彼をみて「うちもそうなるわ」といいた。

と、あっさり共鳴してくれる。そつだ。もはや男は外へ、女は家庭への時代は去りつつある。男でも女でも得意分野があり、やりたいほつが担当すればよりよくこなせるし、家事の苦手な妻は器用な夫と交替し、仕事に精を出して相手をのんびりさせてやるのも悪くない。もうパターン化した既婚の献立コースではなく、同棲感覚で何事も二人で相談し、どちらか手すきの方が育児をやるべし。

とれるほつが育児休暇をとるのもよい。「子供を自分の手で育ててみたかったのです。もう一度、自分を振り返ってみたかったのです。子供の感動と、言葉の理解と行動も再現してみたかったです」

新しい父性の誕生なのかもしれない。しみじみ言つ彼の横顔を見て、満足している様子が手にとるようになった。不服のないやり方は夫婦のストレスを減少させた。

「なにも取っているわけではないんです。ぼくは好きでやっているのです他の人に勧めはしません、この生活とっても気に入っています」

ます。快適ですね」

と、主夫である彼は強調した。それに、物の見方がすっかり変わった例をあげ

「例えばね、家計簿をつけるでしょ。するとガスや電力の消費量をもつと経済的に使う方法はないかと考えるのです。洗濯機や電子レンジの使い方を工夫しますよね」

それがこたえられないくらい楽しい日課と知恵の輪になるらしい。出費チェックするうちに新発見をし、改善策を練っていく。

「家事は創作と似てますよね」

と、彼は自信を持って言った。妻の方は夫が稼いでいたころは職場の愚痴が多くて閉口したが、自分が愚痴を言う立場になると、つい言い方を考えてしまう。あまり主観的な本音を言うてはいけない。客観性を欠いた言い草はただのたわごとになる。愚痴一つにも社会性を持たせなければいけない、と反省するそつである。

「今日は参つたよ。嫌だね、あんな職場はもう行く気はしないよ」

さんざん一日のもめ事を妻に話し、聞いてもらつたあげくの果てに……。

妻に「そんな職場は辞めちゃえ。代わりに私が働くわ」と決意させた張本人である。

反対に愚痴を聞く立場になるとあのころの気恥ずかしさと、いかにわがままであつたか二重の悔恨になり、得手の守備に収まるのが一番よい、と夫の方は思う。全く立場を代え、相手の位置で物事を見たり考えたり、いわばピッチャーとキャッチャーの入れ替えである。これはやってみないと分からない体験であるらしい。取材した私は「ウーム」と唸つたが、二十一世紀はこのケースが増えそつな気がする。『主夫の友』の発刊が間近いかもしくない。

(庄内日報社論説委員・酒田市)